

ローマ帝国とノバディア王国

—その関係性をめぐる編年学的研究—

坂本 翼

The Roman Empire and the Nobadian Kingdom: The Confluence of History and Archaeology in Post-Meroitic Lower Nubia
Tsubasa SAKAMOTO

本稿は、紀元後4世紀後半から7世紀初頭にかけて栄華を誇ったノバディア王国、とりわけその王墓地（クストゥル、バラナ）を対象とする。いったいなぜ二つも王墓地が存在するのか。その差はどのようなものか。そしてそこからいかなる歴史像を描くことができるのか。上記問題意識に根ざす本稿は、まず、L. チュルクの現行編年が必ずしも整合性を保っていないことを指摘する。続いて、彼が見逃した一つの資料を明らかにすることで、一旦は確立されたかに見える歴年代へ再考をせまる。最後に結論として、クストゥルからバラナへの移動そしてその背景にひそむ社会変動が遠くローマ帝国と結びついている可能性を導き出してゆく。

キーワード：ローマ帝国、ノバディア王国、クストゥル、バラナ、編年

This paper investigates the history of Nobadia, one of the three Nubian kingdoms that flourished between the middle of the fourth and the beginning of the seventh centuries AD. Focusing on the royal cemeteries of Qustul and Ballana, it argues that the current chronology established by László Török has difficulties in explaining the development of this kingdom. Why are there two burial grounds? When were they founded? For what reason were they transferred from Qustul to Ballana? Taking account of a previously unnoticed, therefore unconsidered evidence, this paper illustrates a new dimension of the Nobadian history and its relationship with the Roman Empire.

Key-words: Roman Empire, Nobadian Kingdom, Qustul, Ballana, chronology

I. はじめに

アスワン (Aswan) からナイル川を遡ること約 290 km、まもなくエジプトとスーダンの国境付近に差しかかる頃、直径 50 m はあろうかという超巨大墳丘群が目飛び込んでくる。東岸と西岸、すなわちクストゥル (Qustul) とバラナ (Ballana) に広がるこれら墳丘群こそ、かつて当地を統べたノバディア王国の王墓である。紀元後4世紀後半に現れる同王国は、第一・第二急湍付近 (所謂下ヌビア) を勢力範囲としていたこと、ローマ帝国と接触関係にあったことで知られるが、紀元後7世紀初頭、まもなく北進してくるマクリア (Makuria) 王国により侵略・併合され歴史上から姿を消す (Welsby 2002: 84; Godlewski 2014: 162; Obłuski 2014: 181)。その間わずか 250 年余りである¹⁾。

各王墓地の起源は必ずしも定かでない。しかし、1931-1934年に本格的発掘を手がけた W. B. エメリーと L. P. キルワン (Emery and Kirwan 1938; Emery 1948) によれ

ば、クストゥルではウァレンス帝 (364-378²⁾) 硬貨が一枚出土しているため (後述) 紀元後4世紀後半を想定できるという。一方バラナは、硬貨こそないもののキリスト教系遺物 (十字架等) を多数含んでいるため、新宗教到来期 (紀元後6世紀前後³⁾) に年代付けられる可能性が高いという。こうしてクストゥルの古さ、バラナの新しさを突き止めたエメリーとキルワン (Emery and Kirwan 1938: 398-399) は、その暫定的年代観 (AD 364-640) を提示するとともに編年研究を基礎付けている。

しかし彼らは一つの難問を残した。いったいなぜ王墓地はクストゥルからバラナへ移動するのか。実際、大規模な社会変動がここに示唆されているにも拘らず、その実態に真正面から迫った論攷は管見に触れる限り一切認められない。権威的研究者 L. チュルクでさえ、「クストゥルとバラナに看取しうる考古学的知見は極めて僅かである。王墓地移動はおそらく紀元後420-430年頃だろう……しかし、残念ながらその理由は説明できない」 (Török 1988: 221) と

難しさを吐露している。

上記問題を考えるうえで障害となっているのは、クストゥルからバラナへの移動時期がいかなる歴史的画期とも結びつかないことである。ならば今一度年代観を問わなければならない。果たして本当に、クストゥルからバラナへの移動時期は紀元後420-430年頃なのか。そうでないとするればいつそしてなぜなのか。本稿の目的は、この、ノバディア王国史上の難問に一つの答えを提示することにある。

II. 研究史

編年研究の嚆矢となったのがエメリーとキルワンならば、その発展を担ったのはF. W. v. ビッシング (Bissing) である。エジプト学黎明期の代表的研究者として知られる彼は、1930年代末から1940年代初頭にかけて一連の論攷を上梓し、1) クストゥルが紀元後4世紀後半に年代付けられること、2) バラナが紀元後6世紀を下らないことを確認・指摘している (Bissing 1938, 1939a, 1939b, 1941; cf. Monneret de Villard 1940)。その根拠として引き合いに出されている地中海系遺物はあくまで目安に過ぎないものの、特筆すべきは、ビッシングの見解がやがてキルワン (Kirwan 1982: 201) によって全面的に受け入れられることである。現行年代観 (紀元後4世紀後半から紀元後5世紀末) はこうして整備されたと言って良い。

続いて編年研究を推し進めたのがチュルク (Török 1988) である。ビッシング同様地中海系遺物から立論する彼はしかし、墓域間比較に留まっていた既往研究と異なり各埋葬を分析している。その階層的・年代的差異を幅広く検討した彼は、最終的に次のような時間的枠組みを構築することとなる (表1⁴⁾)。ここからまず、クストゥルがバラナよりも古いことを再確認できる。その年代的根拠はのち

表1 墓域編年 (Török 1988: Table 1 を改変)

墓域	世代	埋葬地 (王/女王)	埋葬地 (その他)	年代
クストゥル	0	?	Qu 6, 9, 10, 11, 12, 14, 15	380
	1	Qu 3	Qu 22	380-390
	2	Qu 17	Qu 24, 25, 31	390-400
	3	Qu 36	Qu 26	400-410
	4	Qu 2	Qu 48	410-420
バラナ	5	Ba 80	Ba 2, 6, 49, 90	420-430
	6	Ba 47	Ba 9, 51, 52, 53, 54, 63, 84	430-440
	7	Ba 37	Ba 1, 4, 5, 10, 13, 14, 18, 21, 22, 24, 27, 28, 31, 44, 48, 60, 68, 70, F 5	440-450
	8	Ba 3	Ba 72, 73	450-470
	9	Ba 95	Ba 76, 121, 122	470-480
	10	Ba 114	Ba 111	480-490
	11	Ba 118	Ba 110	490-500

ほど詳しく検討するとして、着目すべきは支配階級 (王または女王⁵⁾) が12世代分設定されている点である。チュルクが拠って立つ階層的・年代的指標は多岐にわたっているが、あえてまとめれば以下2点に集約できよう。

第一に冠である (Emery and Kirwan 1938: 182-186; Török 1987: 55-61, 1988: 169-175)⁶⁾。階層性議論におけるその価値はあえて強調するまでもなからう。ただし議論を複雑にしているのは、ひとえに冠と言っても様々なヴァリエーションが認められるため、そこからただちに王/女王を敷衍することができない点である。例えば、Ba 51 出土冠 (Farid 1963: Plate xxvi) はむしろサークレットと呼ぶべき簡素なものであり、王/女王以外が身に付けていたとしても何ら不思議ではない⁷⁾。したがってチュルク (Török 1988: 80) は剣や槍・宝玉類等からも検討を試みているものの、これによる階層的指標の混在化が王墓特定作業を一層複雑なものにしている⁸⁾。

第二に埋葬構造である。その差異を初めて年代的議論へ昇華させたのはB. G. トリガー (Trigger 1969) だが、チュルク (Török 1988: 81-89) も似たような議論を展開している。彼によれば埋葬構造は型式学的変化 (タイプAからタイプE) を伴うため、変化傾向に則することで相対編年を構築できるという。これが事実ならば慧眼である。ところが、のちにトリガー (Trigger 1989; cf. Hofmann 1992) が強く批判するように、チュルクの「型式学的変化」は表面的類似の指摘に過ぎないばかりかその主張にもしばしば矛盾が認められる⁹⁾。常に新たな地平を切り開かんとする彼の研究姿勢は尊重されて然るべきだが、上記観察から明らかかなように、彼が1988年に打ち立てた時間的枠組みは必ずしも整合性を保っているとは言い難いのが現状である (Dann 2009: 50-52)。

以上を踏まえ、本稿ではまず改めてチュルクがよって立つ点をつぶさに観察し、そこに介在する大きな矛盾点を指摘する。次に、彼が見逃した一つの資料を明らかにすることで、一旦は確立されたかに見える歴年代へ再考をせまる。これらの手続きは最終的に、いったいつ、そしてなぜ王墓地がクストゥルからバラナへ移動したのかという疑問を紐解く鍵となる。

III. 分析

1. クストゥルの上限年代

王墓地における最重要年代資料、それが冒頭で触れたウェアレンス帝硬貨である (Emery and Kirwan 1938: 49)。Qu 14 (図1) 内部で見つかった本硬貨は、歴年代へ敷衍可能なただ一つの遺物であるためまずその再検討から始めなければならない。

硬貨が示唆するように、Qu 14は多くの例外的特徴を有

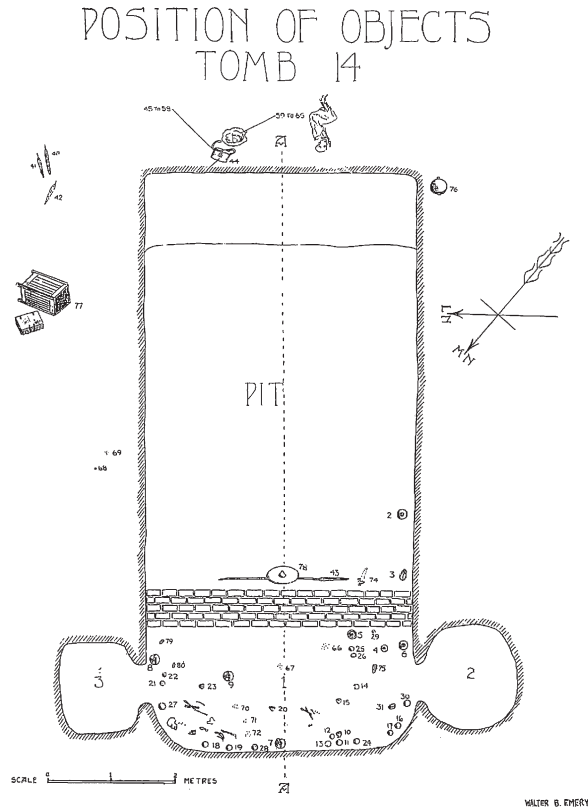


図1 Qu 14 平面図 (Emery and Kirwan 1938: Fig. 16)

している。まず本墳丘ではメロエ文字入り鉄槍が見つかった¹⁰⁾。「すばらしいもの・信頼できるもの」という試訳の是非はともかく (Kirwan 1963: 72)、同文化との連続性が示唆されていると言えよう。次に、この連続性にはさらなる傍証がある。なぜなら本墳丘ではメロエ出土品 (Dunham 1963: 175, Fig. 126) とよく似た指輪 (図2) が見つかっているからである。チュルク (Török 1974) はここに同王国との歴史的繋がりを見出そうとしている。そして最後に、本墳丘はコプト系彩文フラスコ (図3) を出土した唯一の埋葬である。類例がコンスタンティウス2世 (337-361) 硬貨と相伴していることから (Petrie 1905: 27, No. 102, Plate xxxii; Emery and Kirwan 1938: 398)、上記彩文フラスコも同時期に年代付けられる可能性が高い。Qu 14 がクストゥル最古 (世代0) とされるのにはこのような理由がある (Emery and Kirwan 1938: 398; Török 1988: 93-98; Williams 1991: 10)。

しかし一つ疑問が生じる。なぜ Qu 14 は紀元後 380 年に位置付けられているのか。ウァレンス帝硬貨の製造年が定かでないことを踏まえるならば、その上限年代 (terminus post quem) は紀元後 364 年に求めてしかるべきだろう。これに対しチュルク (Török 1988: 94-95) は次のような説明を行なっている。

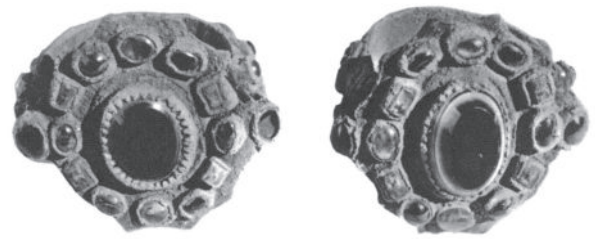


図2 Qu 14 出土指輪 (Emery 1948: Plate 17A)

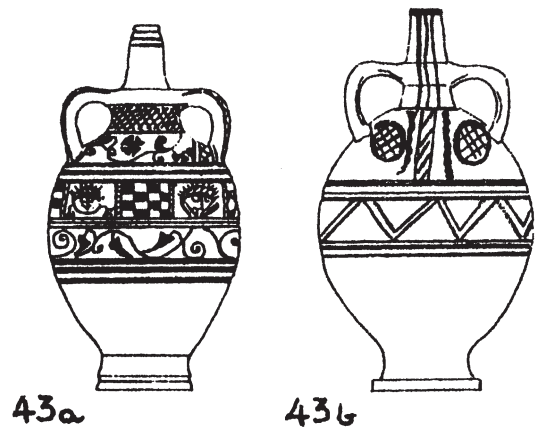


図3 Qu 14 出土コプト系彩文フラスコ (Emery and Kirwan 1938: Plate 113)

「ヌビア出土硬貨をここで詳述するつもりはない……しかし、その製造から埋納までにかかる期間は編年と関わるため若干考察しておこう。ここで取り上げたいのは、カラブシャ (Kalabsha) E6 号墓出土硬貨4枚である。各年代幅 (330-335, 330-335, 335-340, 341-346) が似通っていることから一括埋納されたのだろう……一括埋納されたとすれば、最古の硬貨は少なくとも10-15年流通していたことになる。また、硬貨所有者自身の埋葬にもさらなる年月を要しただろう……以上に鑑みて、ウァレンス帝硬貨はその製造から埋納までに20年程経過していたと考えたい」。

論点となっているのは、製造から埋納までにかかる理論的流通期間である。確かに、引き合いに出されている硬貨群 (Ricke 1967: 37, Abb. 57) を一括品とするならば、その埋納時期は最新硬貨へ求めなければならない。残る3枚はしたがってすでに10-15年流通しているに違いない。ただし問題は、チュルクが本流通期間をウァレンス帝硬貨にも当てはめようとしている点である。当然ながらこれはあくまでカラブシャ出土硬貨群を対象としたものに過ぎず、ウァレンス帝硬貨への敷衍作業は考古学的根拠を欠いている。似たような矛盾は Qu 14 副葬品年代にも看取するこ

とができる(表2)。

問題点は3つ。第一に、チュルクによれば表掲遺物はいずれもローマ帝政期エジプトからの搬入品である。したがってその根底には硬貨同様の憶測、すなわち理論的流通期間というあいまいさを孕んでいる。第二に、すでにトリガー(Trigger 1989: 543-544)が指摘しているように、チュルクの分析手法(地中海系遺物との美術史的比較)は主観に大きく左右されるためその精度に疑問が付きまとう。第三に、仮にその精度を認めたとしても、Qu 14を紀元後380年とすべき積極的理由は必ずしも明示されていない。換言すれば、ここでもチュルクの主張は考古学的根拠を欠いているのである。

実際、上記主張には反証が存在する。その反証こそ、チュルクが見逃したもう一枚の硬貨である。Z. サアド(Saad)とS. ファリド(Farid)がクストゥルで発見した本硬貨をめぐっては、確かに、多くの情報が曖昧なままとなっている(Farid 1973, 1981)。しかしあらかじめ確認しておくべきは、後述するように、本硬貨が紀元後380年をさかのぼる可能性が極めて高いことである。これは本稿議論を根本から左右するため、以下詳しく検討する。

2. クストゥル出土新硬貨の年代

写真未公表のため、新硬貨について知りうるのは次の記述のみである(Leclant 1961: 199): 直径12mm、刻銘D. N. CONS [?]。最初の2文字が「我らの主 Dominus Noster」すなわちローマ皇帝を意味するならば、続く4文字はコンスタンティヌス朝期(306-363)を示唆している。

表2 Qu 14 副葬品年代 (Török 1988: 93-98 より作成)

遺物番号	遺物詳細	チュルクの年代観
42	槍	360-370 以前
48	指輪型印章	メロエ後期
49	指輪型印章	メロエ後期
50	耳飾り	4世紀後半
54	腕輪	4世紀末
59	耳飾り	4世紀末(392以前)
60	腕輪	4世紀後半
61	首飾り	4世紀末
65	耳飾り	4世紀末(392以前)
74	ランプ	4世紀後半
75	ランプ型容器	4世紀中葉から5世紀中葉
77	小箱	4世紀後半前葉
84	指輪	360-370

表3 カスル・イブリーム出土硬貨内訳 (Frend 2004 より作成)

年代	王/皇帝	出土枚数	計
246-221 BC	プトレマイオス3世	1+5 (?)	6
27 BC-AD 192	アウグストゥス-コンモドゥス	21+6 (?)	27
AD 276-408	プロプス-アルカディウス	105+29 (?)	134

同様のつづりをもつローマ皇帝が複数存在する以上人物特定は難しいと言わざるを得ないが、検討に価する一つの方策がある。それは、ヌビア各地の類例資料から年代観を割り出そうというものである。比較精度を高めるにはかなりの硬貨数が必要となろうが、とりわけカスル・イブリーム(Qasr Ibrim¹¹)では160枚以上が検出されているためその妥当性は担保されうると考える。W. H. C. フレンド(Frend 2004)はこれらを次のように区分している(表3)¹²。

まず目を引くのは、プトレマイオス3世硬貨が6枚出土していることである。したがってカスル・イブリームが当該期に利用されていた可能性を指摘できる。一方、ローマ硬貨161枚は二期に分かれる。前期がアウグストゥスからコンモドゥス¹³、後期がプロプスからアルカディウスである。なお紀元後192-276年にかけては一切出土しない。その理由は定かでないものの、特筆すべきは、以後134枚がプロプスからアルカディウスまで全皇帝の硬貨を含んでいることである(Frend 2004: 168)。この均質性もまた上記方策の妥当性を担保するものと言えよう。ならば次の課題は、134枚中に新硬貨同様の刻銘を特定することである(表4)。

D. N. CONSと刻まれたコンスタンティヌス朝硬貨は全16枚存在する¹⁴。これらが紀元後341-361年に及んでいることを考慮すると、新硬貨もまた同時期に収まる可能性が高い。最も類例としてふさわしい2枚(番号59, 64)の製造年は特定されていないものの、新硬貨がコンスタンティヌス朝期に属することを疑う余地はいずれにせよ無かろう。したがってここから次の新知見を導き出すことができる。

1) チュルクとは対照的に、クストゥルの上限年代はおそらく紀元後380年以前へ求めることができる。その根拠

表4 カスル・イブリーム出土コンスタンティヌス朝硬貨(刻銘D. N. CONS) (Frend 2004 より作成)

番号	皇帝	刻銘	直径	製造年
59	コンスタンス1世	DN CONSTANS [...]	12mm	?
60	コンスタンス1世	DN CONSTANS [...]	13mm	346-348
63	コンスタンティウス2世	DN CONSTANTIUS [...]	15mm	?
64	コンスタンティウス2世	DN CONSTANTIUS [...]	12mm	?
65	コンスタンティウス2世	DN CONSTANTIUS [...]	16mm	341-346
66	コンスタンティウス2世	DN CONSTANTIUS [...]	17mm	348-350
67	コンスタンティウス2世	DN CONSTANTIUS [...]	17mm	?
68	コンスタンティウス2世	DN CONSTANTIUS [...]	16mm	?
69	コンスタンティウス2世	DN CONSTANTIUS [...]	16mm	?
70	コンスタンティウス2世	DN CONSTANTIUS [...]	14mm	348-350
71	コンスタンティウス2世	DN CONSTANTIUS [...]	20mm	355-361
72	コンスタンティウス2世	DN CONSTANTIUS [...]	20mm	355-361
73	コンスタンティウス2世	DN CONSTANTIUS [...]	16mm	358-361
74	コンスタンティウス2世	DN CONSTANTIUS [...]	16mm	358-361
75	コンスタンティウス2世	DN CONSTANTIUS [...]	16mm	358-361
80	ガルス	DN CONSTANTIUS [...]	20mm	351-354

となるのが従来見過ごされてきたコンスタンティヌス朝硬貨である¹⁵⁾。硬貨流通期間として20年程見積もったとしても、墓域開始年代は紀元後360年頃に留めてしかるべきであろう。

2) ここで興味深いのは、コンスタンティヌス朝硬貨に加えてヴァレンティニアヌス朝硬貨も見つかっていることである。後者を出土したQu 14は直径41mにも及ぶことから、紀元後4世紀後葉にはすでに支配階級が確立されていた可能性が高い。前者の出土地点は必ずしも判然としなものの、サアドとファリドが手がけた墳丘群は直径20mに満たないことから、紀元後4世紀中葉にはまだ社会階層化が十分に進行していなかった可能性もまた高いと言えよう。さらなる検証は無論不可欠であろうが、以上の観察は、クストゥルが形成期(コンスタンティヌス朝=支配階級確立前)と発展期(ヴァレンティニアヌス朝=支配階級確立後)に分かれることを示唆している。

3. クストゥルからバラナへ

続いて移動時期を検討する。まず、本稿冒頭で述べたようにチュルクは紀元後420-430年頃を想定しているが、ここでもその理由は不可解と言わざるを得ない。なぜなら、当該期王墓として引き合いに出されているQu 2・Ba 80の副葬品年代はいずれも精度を大きく欠いているからである(表5、6)。前者にいたっては1点しかデータが提示されておらずここからどのように上記年代観が導き出されているかは説明されていない。したがって、本稿は独自に検討を試みる必要がある。

表5 Qu 2 副葬品年代 (Török 1988: 108-109 より作成)

遺物番号	遺物詳細	チュルクの年代観
112	水差し	4世紀と5世紀の境

表6 Ba 80 副葬品年代 (Török 1988: 109-114 より作成)

遺物番号	遺物詳細	チュルクの年代観
52	椀	420-460
55	フィルター	4世紀末から5世紀初頭
59	香炉	5世紀初頭(?)
61	鍋	4世紀末から5世紀初頭
63	フィルター	4世紀末から5世紀初頭
66	香炉	5世紀初頭(?)
67	フラスコ	4世紀後半
68	ランプ	4世紀末から5世紀初頭
69	ランプ	テオドシウス朝
72	鍋	4世紀末から5世紀初頭
73	フラスコ	5世紀
74	フラスコ	5世紀
75	折りたたみ椅子	5世紀初頭
105	天秤	5世紀
106	天秤	5世紀
111	指輪	4世紀末から5世紀初頭

そしてここが最も難しい。なぜならまずバラナでは、歴年代へ敷衍可能な硬貨が一切見つからないからである。似たような指摘は未盗掘墓¹⁶⁾にも当てはまる。確かにその埋葬室では大量の副葬品、とりわけギリシャ文字が書かれたアンフォラが出土しているものの(Emery and Kirwan 1938: 401-407)、これらが言及しているのは内容物や容量に過ぎずそこから特定史実を導き出すことはできない。ならばどのように墓域年代へ迫ればよいのか。一瞥するとこの疑問に答える術はないように思える。事実、果敢に編年研究を重ねてきたのはチュルク(Török 1979, 1986, 1988, 1995)ただ一人と言っても過言ではなく、彼が1988年に打ち立てた業績が現在でも引用されていることを考慮すれば、いかに本課題が学者の挑戦を拒み続けてきたかがわかるだろう(Dann 2009: 52)。

しかしバラナの検討が困難であろうとも、クストゥルの放棄年代をうかがい知ることができる。その手がかりとなるのがアンフォラである。とりわけ重要なのは飛沫状装飾をもつタイプ7a(Emery and Kirwan 1938: 389, Plate 111; Adams 1986: Ware R30)だが、具体的検討に先立ち、まずは全タイプを提示しておく必要がある(図4、表7)。

大規模な盗掘にもかかわらず多数のアンフォラが見つかる(cf. Rose 1992: 94-95, 125-127)。ただしその本質へ迫るにはまず、数点しか確認されない雑多型式(1-5、8-9、11-12)を取り除く必要がある。タイプ10も同様である。確かにこれはバラナに多数出土するもののクストゥルにはまず出土しない。後者の放棄年代議論にあたっては、したがって本型式も適切とは言えない。残るは3つ。以下検討するタイプ7を除けば、タイプ6とタイプ13はいずれも相当数出土しており確かに重要だ。しかし問題は、土器実測図が一点も発掘報告書に掲載されていないことである。大量の副葬品を出版するため止むを得なかった面もあるが、いずれにせよこれが原因となり、各個体資料の把握はおろかそこから年代的議論へ昇華させることも不可能と言わざるを得ない¹⁷⁾。

ではタイプ7はどうか。これは4型式に細分されている(7a、7b、7c、7d)。1点しか確認されない後者二つと対照的に、前者二つは明らかな重要性を帯びている。なぜならタイプ7aはクストゥル、タイプ7bはバラナにしか出土しないからである。盗掘を理由に異議を唱える向きもあるが、両型式は未盗掘墓においても一切共伴しないことからその可能性は低いと考えて差し支えなからう¹⁸⁾。換言すれば、いま、クストゥルからバラナへの移動はタイプ7aからタイプ7bへの移行として理解できることになる。ではそれはいつなのか。

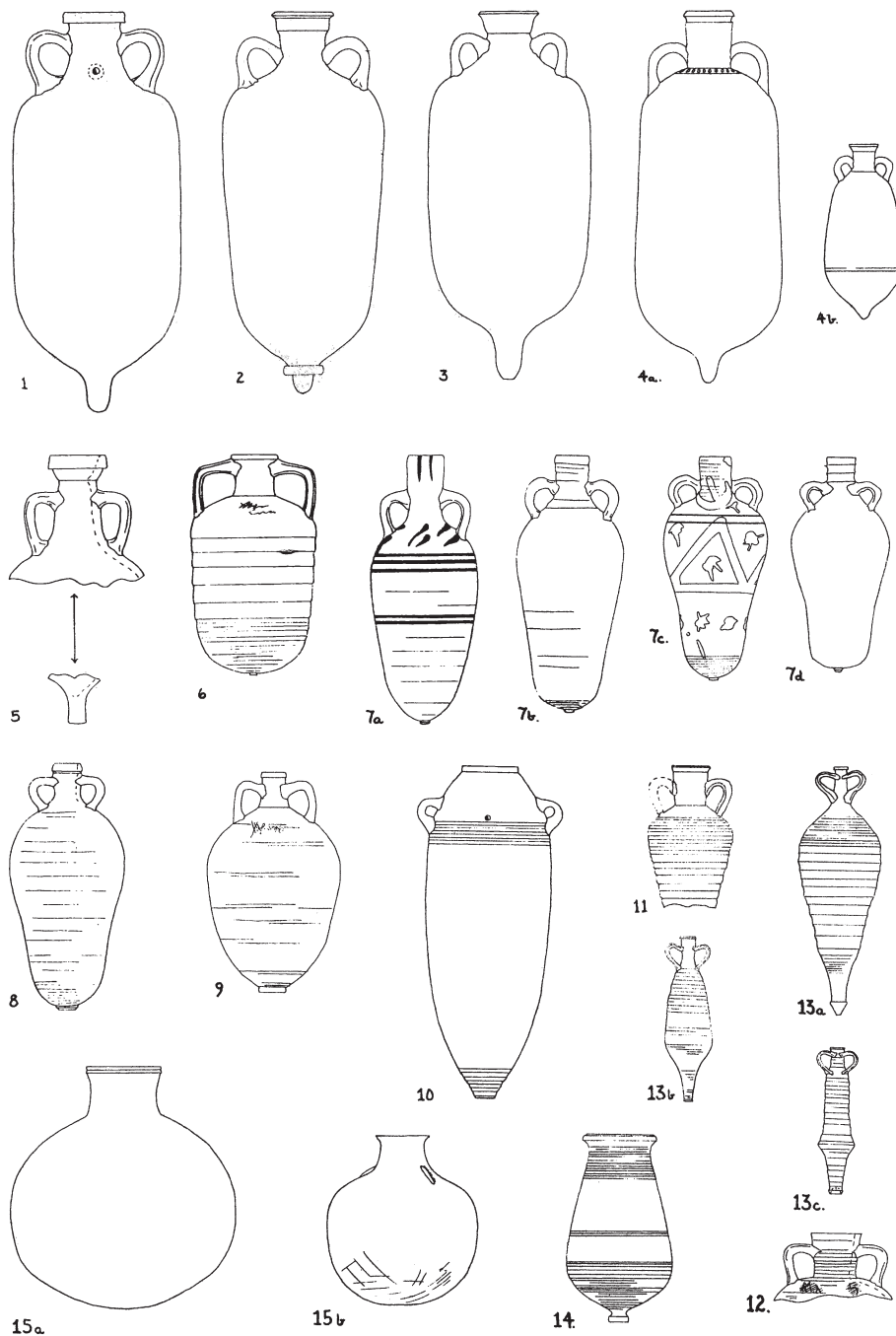


図4 アンフォラタイプ一覧 (Emery and Kirwan 1938: Plate 111)

4. タイプ7a アンフォラはいつ姿を消すのか：歴史的解釈
 言うまでもなく、年代的議論において肝要なのは硬貨である。ただし、上述のように王墓地出土硬貨はわずか2枚に留まるため、ここからタイプ7a アンフォラの年代観を導き出すにはいささか無理がある。コンスタンティヌス朝硬貨の帰属埋葬地が定かでない以上尚更と言えよう。したがってヌビア各地類例資料との比較が不可欠となる (表8)¹⁹⁾。

タイプ7a アンフォラは9点出土している。本型式がバラナに出土しないことをすでに指摘したが、言い換えればこれは表掲遺跡群がクストゥル併行期ということを示唆しており、広域編年構築の指標となり得る。ただし本稿においてより重要なのは関連出土硬貨である。その鑄造時期から判断する限り、タイプ7a アンフォラは紀元後346-450年に収まる可能性が高いと言えるかもしれない。だがこの

表7 アンフォラタイプ別出土状況 (Emery and Kirwan 1938 より作成)

	1	2	3	4a	4b	5	6	7a	7b	7c	7d	8	9	10	11	12	13a	13b	13c
Qu 2		4					3	20					2				+		
Qu 3							5	2									14	8	
Qu 14				1															
Qu 17							2	2						1			6		
Qu 24								4											
Qu 25				1				2											
Qu 31							3	1									6		
Qu 36							6	9									7		
Qu 48																			5
Ba 2	2		1				21		20					3			4		
Ba 3	1	1	4				81		76					14	1		20	6	
Ba 4	1			1			22		34					7					
Ba 6	1	1					17		62					2			3		
Ba 9	1	1		1			7		9								5		
Ba 10		1	1				9		3								4		
Ba 14							3		+										
Ba 22							1		8					1					
Ba 31		1							2										
Ba 37				3			8		4								1		
Ba 47							+		+										
Ba 48	2				1		2		2								3		
Ba 49				1															
Ba 60																	2		
Ba 68							2		6										
Ba 70									5									1	
Ba 73		1		1			7		6								10		
Ba 80						5	71		97		1			26			26		
Ba 84							1		7										
Ba 90							12		32										
Ba 95				3			42		63					22			29		17
Ba 111		1					14		40					10		1	3		
Ba 114		3					29		31	1				12		1	20		
Ba 118		1					61		40					7		1	17		
Ba 121							20		47			1		12					
Ba 122						1	20		53					4			7		

タイプ 説明 (Emery and Kirwan 1938: 388-390 より適宜意訳)

- 1-5 所謂「バラス (Ballas) 系」アンフォラ。
6 典型的なワインアンフォラ……ギリシア文字を多数伴うため搬入品かつ重要年代資料と考えられる……その出土数の多さに照らせば、エジプトとヌビアが当時盛んに交易していたことを疑う余地はない。
7 タイプ7a (長頸+飛沫状装飾) はクストゥルにしか存在しないのみならず、とりわけ Qu 2 と Qu 3 [ママ] に多く出土する……タイプ7b-7d は7a のヴァリエーションと考えられ、幾分時代が下るかもしれない。
8-9 タイプ8 (ピンク系胎土+赤色ウォッシュ) は7のヴァリエーションである……タイプ9は他のいかなるアンフォラとも異なる。肩部に施されたグラフィットのうち一点は、専門家 (A. S. Hunt) によると紀元後5-6世紀に年代付けられるという。
10 所謂「サイス (Saite) 系」アンフォラ。
11-12 両タイプともおそらく搬入品。その特徴的な肩部形態から判断する限り、紀元後6-7世紀初頭のエジプトから持ち込まれた可能性が高い。
13 紀元後2-3世紀の所謂「ラインラント (Rhenish) 系」アンフォラもしくはその模倣品。

推論はいささか尚早だ。なぜなら、これまた最新研究 (Gradel 2008: I 296; Dann 2009: 26) が見逃しているように、サヤラ (Sayala) 出土硬貨とテオドシウス2世の関連性はすでに次のように見直されているからである (Reiser-Haslauer and Satzinger eds. 1979: Cat. No. B 30)。「東ローマ製、ほぼ間違いなく紀元後400年頃 (テオドシウス1世以後ホノリウス以前)、表面には右を向いた皇帝の胸像、裏面には SALVS REI PVBLICAE の刻銘……おそらくコンスタンティノーブル製、直径0.95 cm」。

上記抜粋によれば、サヤラ出土硬貨は紀元後400年頃に位置付けられるという。実際、1) 東ローマ製であるこ

と、2) SAL[U]S REI P[U]BLICAE と刻まれていることもこれを裏付けている。まず、当該期東ローマ皇帝としてアルカディウス (383-408) とテオドシウス2世 (408-450) が挙げられるものの、後者の可能性はおそらく低い。なぜなら後者へ明瞭に帰せられるヌビア出土硬貨はこれまで一枚も見つかっていないからである²⁰⁾。次に、先述したカスル・イブリームにおいて、同刻銘をもつ硬貨は例外なく紀元後400年以前に鑄造されている²¹⁾。サヤラ出土硬貨はしたがってむしろアルカディウスへ関連付けるのが相応しい。

以上を踏まえて表8へ戻ろう。いま、タイプ7aアン

表8 タイプ7a アンフォラー一覧

遺跡	遺物番号	関連出土硬貨		文献
		皇帝	鑄造年 (または在位期間)	
エレファンティネ	K 704	テオドシウス1世	388	1
カラブシャ	—	—	—	2
ワディ・キトナ	R 12	コンスタンティウス2世	346-361	3
サヤラ*	76834	テオドシウス2世	(408-450)	4
ジュベル・アッダ	GA 76-77	テオドシウス1世	(379-395)	5
クストゥル	Q 51A-1	ヴァレンス	(364-378)	6
ミルマッド	—	—	—	7
ガマイ	Z1/R7	—	—	8
ガマイ*	01 : 3	—	—	9

(1) Gempeler 1992: 50, Abb. 120/6, Taf. 3.15-16, 38/5.

(2) Emery and Kirwan 1938: 20, Fig. 5/1.

(3) Strouhal 1984: 123-124, 230, Plate 74, P 3058.

(4) Kromer 1967: 80, 129-130, Abb. 17/Fig. 2.

(5) Millet 1964: 9, Plate v/Fig. 14, 2005: 61, Photograph 1-32.

(6) Emery and Kirwan 1938: 49; Williams 1991: 282, Fig. 130/e, Plate 47/c.

(7) Presedo Velo et al. 1970: 16, Fig. 21.

(8) Bates and Dunham 1927: Plate lxiii/fig. 29.

(9) Sève-Söderbergh 1981: 177.

フォラは次のローマ皇帝硬貨を伴っていることになる：コンスタンティウス2世、ヴァレンス、テオドシウス1世、アルカディウス。言葉を変えれば、タイプ7a アンフォラがヌビアから姿を消すのは遅くともアルカディウス治世末（紀元後400年頃）であり、したがってクストゥルからバラナへの移動もまた同時期に生じた可能性が高い。確かに、これはチュルクの年代観をほんの20年押し上げただけに過ぎない。しかしその帰結は極めて重要だ。なぜなら、もし上記年代修正的を射ているとするならば、王墓地の移動理由とその背景にひそむ社会変動は、いま、初めて、次のように説明することができるからである。

1) 王墓地はまずクストゥルに形成される。その上限年代が紀元後380年以前へさかのぼること、その放棄年代が紀元後400年頃に求められる可能性に触れたが、このうち前者については、出土硬貨にもとづき形成期（コンスタンティヌス朝）と発展期（ヴァレンティニアヌス朝）の存在をさらに指摘した。後者については、アンフォラの盛衰に鑑みて、ローマ帝政期エジプトとの交易関係に大きな変化が生じていた可能性が極めて高い。

2) 王墓地は続いてバラナに形成される。ここで押さえておくべきは、まさにローマ帝国が紀元後395年に分裂することである。分裂により生じた社会的緊張が異国との関係性にも影響を及ぼしていたことは想像に難くなく、その一つにノバディア王国が含まれていることは、王国各地でローマ帝国からの搬入品が見つかる点に伺い知ることができる (Junker 1925: pl. xii, No. 143; Deichmann 1966; Sakamoto 2016: 72, fig. 3)。

3) 上記観点に立つとき、ローマ帝国とノバディア王

国、双方の歴史的画期が重なりはじめる。すなわち前者が紀元後395年に分裂したならば、これをきっかけとして後者との関係性にほころびが生じ、クストゥルからバラナへの王墓地移動が引き起こされた可能性を導くことができるのである。上記年代修正が切り開く歴史的地平のさらなる素描は今後の課題とせざるを得ないが、冠がバラナにしか出土しない点を考慮すると、クストゥルからバラナへの移動が「王」を頂点とする支配構造創出に結びついていたことは間違いなからう。おそらくここにローマ帝国、そしてやがて訪れるキリスト教との関係性に苦心し続けたノバディア王国 (Sakamoto forthcoming) の歴史的画期、そしてノバディア王家が取った政治的戦略の一端が映し出されているのではないだろうか。

IV. おわりに

以上、2つの王墓地をめぐる議論を進めてきた。結論としてまとめれば、1) クストゥルにはヴァレンティニアヌス朝硬貨のみならずコンスタンティヌス朝硬貨も存在すること、2) したがってその上限年代は紀元後380年以前、おそらく360年頃にさかのぼらせる必要があることを主張した。バラナについては憶測を出さないものの、3) タイプ7a アンフォラと出土硬貨の関わりを根拠としてクストゥルが紀元後400年頃に放棄されること、4) ローマ帝国分裂がその背景に横たわっていることにも触れた。

一方、メロエ王国からノバディア王国への移行過程はいまだ深い闇に包まれている (Lenoble 1999; Török 1999)。確かに、クストゥルの上限年代を手掛かりとすればその画期は紀元後360年頃となろうが、考古学研究はいまだ多く

の課題を抱えている。碑文解読が遅々として進まぬ現状、いったいどのように物質資料から歴史像へ迫ればよいのか。当該学問の可能性を信じるならばこれら質問を投げかけそれに答えてゆくしかない。もし本稿がそのような可能性の一端を提示・立証できているとすれば、筆者の目的はとりいそぎ果たされたことになる。

謝辞

筆者は、その関心の多くをヴァンサン・ロンド氏（ルーブル美術館・古代エジプト美術部門長）に負っている。また、サヤラ出土硬貨についてはマンフレド・ピータク氏（ウイーン大学名誉教授）とクラウス・ヴォンドロベック氏（ウイーン美術史美術館主任学芸員）から格別の配慮を、論文構成については査読者から極めて有益かつ建設的なご指摘を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

註

- 1) これを一般にポストメロエ（post-Meroitic）期と称する。
- 2) ローマ皇帝在位期間は Cooley 2012: 488-509 に準拠する。
- 3) 宣教師がノバディア王国へやってくるのはユスティニアヌス 1 世（527-565）治世以降と考えられている（Richter 2002: 42-98; Dijkstra 2008: 271-304）。
- 4) 本稿では「Qu」「Ba」を用いて埋葬地を示す。例えば Qu 14、Ba 80 はそれぞれクストゥルの 14 号墳丘墓、バラナの 80 号墳丘墓を意味する。なお「F 5」については次を参照（Farid 1963: 19-21）。
- 5) 性別は El-Batrawi 1935: 132-159 を参照。
- 6) 計 11 点がバラナ（Ba 6, 10, 47, 51, 95, 80, 114, 118）で出土している。クストゥルには出土していない。
- 7) チュルク（Török 1988: 124）は Ba 51 被葬者を低位階級としている。
- 8) 実際、1960 年代にはクストゥルで驚くべき数の葬祭殿が見つかっており、中でも Qu 31・Qu 48 は、それぞれ 50 基以上を伴うことから支配階級埋葬地として崇められていた可能性が高い（Williams 1991: 5）。両墳丘の再検討は別稿を期さざるを得ないが、これらはチュルクの見解に一定の疑義を投げかけるものと言えよう。
- 9) 例えばチュルクは、Ba 80, 95, 111, 114, 118, 121, 122 を全てタイプ C としているにも拘らず、Ba 80（AD 420-430）とそれ以外（AD 470-500）に無視できない年代差が生じている。
- 10) REM 1027。REM とはメロエ文字集成書（Leclant et al. 2000）の頭文字であり、この場合、同集成書における 1027 番目の資料を指す。
- 11) バラナの約 60 km 北にあり、ノバディア王家に次ぐ有力者（在地エリート？）の拠点的集落と考えられている（Dijkstra 2013: 119-122; Edwards 2014: 423-426）。
- 12) フレンドの論攷から漏れた硬貨群については Adams 1996: 296, 2010: 304-305 を参照。硬貨群の正確な検出地点については Rose 2007: 24 註 3 を参照。
- 13) コンモドゥスの遺物はヌビア各地で出土している（Kirwan 1939: 9, Plate ix/4-5; Leclant 1963）。
- 14) DN CON……という硬貨も一枚出土している（Adams 2010: 209）。
- 15) Qu 3 出土コンスタンティヌス 1 世（？）のカメオをここに加えることができよう（Emery and Kirwan 1938: Plate 62L; Kirwan 1963: 71）。
- 16) Ba 1, 5-10, 18-19, 24, 27-29, 34, 51-52, 80, 95, 114, 118, 121（Emery and Kirwan 1938; Farid 1963）。
- 17) ただし Gempeler 1992: 52-55 の試みを参照。
- 18) この非共存に鑑みて、クストゥルとバラナを同時期とするトリガー（Trigger 1969: 125）の見解は受け入れ難い。
- 19) ただしその幾つかは破片資料であり、必ずしも疑問がないわけではないことを断っておく（不確実資料には*を付した）。なおファラスでも似たようなアンフォラが見つかっている（Griffith 1924: Plate xxiii/type XLVIIIe）。
- 20) ヌビア出土硬貨の集成は Hofmann 1978: 193-197; Zach 1992: 170-173; Gradel 2008: I 295-300 を参照。
- 21) ウァレンティアヌス 2 世（388-392 または 383-392；硬貨番号 108-112）、テオドシウス 1 世（393-395；硬貨番号 125）、アルカディオス（383-392；硬貨番号 129）、ホノリウス（393-395；硬貨番号 136）。

参考文献

- Adams, W. Y. 1986 *Ceramic Industries of Medieval Nubia*. Lexington, University Press of Kentucky.
- Adams, W. Y. 1996 *Qasr Ibrim: The Late Mediaeval Period*. London, Egypt Exploration Society.
- Adams, W. Y. 2010 *Qasr Ibrim: The Earlier Medieval Period*. London, Egypt Exploration Society.
- Bates, O. and D. Dunham 1927 Excavations at Gammal. *Harvard African Studies* 8: 1-122.
- El-Batrawi, A. M. 1935 *Report on the Human Remains*. Cairo, Government Press.
- Bissing, F. W. v. 1938 Veltjums profesoram F. Balodim. In V. Ğinters, L. Liberts and K. Straubergs (eds.), *Pieminekļu valdes priekšsēdētājam, profesoram Dr. Francim Balodim draugi, darba biedri un skolnieki 25 gadu akadēmiskās darbības atcerei*, 21-32. Rīgā, Pieminekļu valde un Valsts papīru spiestuve un naudas kalnve.
- Bissing, F. W. v. 1939a Review of Emery and Kirwan 1938. *Orientalistische Literaturzeitung* 42: 506-512.
- Bissing, F. W. v. 1939b Alexandrinische Kunst in nubischen Tumulusgräbern um 400 n. Chr. *Forschungen und Fortschritte* 15: 350-352.
- Bissing, F. W. v. 1941 Kunstgeschichtliche Bedeutung der neuentdeckten Nekropolen im Gebiet des II Nilkataraktes. In *Miscellanea gregoriana: Raccolta di scritti pubblicati nel I centenario dalla fondazione del Pont. Museo Egizio (1839-1939)*, 9-28. Città del Vaticano, Tipografia Poliglotta Vaticana.
- Cooley, A. E. 2012 *The Cambridge Manual of Latin Epigraphy*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Dann, R. J. 2009 *The Archaeology of Late Antique Sudan: Aesthetics and Identity in the Royal X-Group Tombs at Qustul and Ballana*. Amherst, Cambria Press.
- Deichmann, F. W. 1966 Eine alabasterne Largitionsschale aus Nubien. In W. N. Schumacher (ed.), *Tortulae: Studien zu altchristlichen und byzantinischen Monumenten*, 65-76. Rom-Freiburg-Wien, Herder.
- Dijkstra, J. H. F. 2008 *Philae and the End of Ancient Egyptian Religion: A Regional Study of Religious Transformation (298-642 CE)*. Leuven-Paris-Dudley, Peeters.
- Dijkstra, J. H. F. 2013 Qasr Ibrim and Religious Transformation of Lower Nubia in Late Antiquity. In J. van der Vliet and J. L. Hagen (eds.), *Qasr Ibrim, between Egypt and Africa: Studies in Cultural Exchange (NINO Symposium, Leiden, 11-12 December 2009)*, 111-122. Leuven, Peeters.
- Dunham, D. 1963 *The West and South Cemeteries at Meroë*. Boston, Museum of Fine Arts.
- Edwards, D. N. 2014 *Creating Christian Nubia: Processes and Events on the*

- Egyptian Frontier. In J. H. D. Dijkstra and G. Fisher (eds.), *Inside and Out: Interactions between Rome and the Peoples on the Arabian and Egyptian Frontiers in Late Antiquity*, 407-431. Leuven-Paris-Walpole, Peeters.
- Emery, W. B. 1948 *Nubian Treasure: An Account of the Discoveries at Ballana and Qustul*. London, Methuen & Co. Ltd.
- Emery, W. B. and L. P. Kirwan 1938 *The Royal Tombs of Ballana and Qustul*. Cairo, Government Press.
- Farid, S. 1963 *Excavations at Ballana 1958-1959*. Cairo, Government Press.
- Farid, S. 1973 Excavations of the Antiquities Department at Qustul: Preliminary Report (Season 1958). *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 61: 31-35.
- Farid, S. 1981 Qustul, Ballana, Tafa, Debod, Kalabsha, Adama and Wadi es-Sebu'. In L. Habachi (ed.), *Actes du II^e symposium international su la Nubie (février 1-3, 1971)*, 1-6. Le Caire, Institut français d'archéologie orientale.
- Frend, W. H. C. 2004 Qasr Ibrim 1974: The Coins. *Journal of Egyptian Archaeology* 90: 167-192.
- Gempeler, R. D. 1992 *Die Keramik römischer bis früh-arabischer Zeit*. Mainz, Philipp von Zabern.
- Godlewski, W. 2014 The Kingdom of Makuria. In J. R. Anderson and D. A. Welsby (eds.), *The Fourth Cataract and Beyond: Proceedings of the 12th International Conference for Nubian Studies*, 155-169. Leuven-Paris-Walpole, Peeters.
- Gradel, C. 2008 *Le commerce à longue distance dans le royaume de Méroé: Échanges avec l'Égypte et le Bassin méditerranéen*. Ph. D. Thesis, Université Charles de Gaulle - Lille III.
- Griffith, F. Ll. 1924 Oxford Excavations in Nubia, XXX-XXXIII. *Liverpool Annals of Archaeology and Anthropology* 11: 141-180.
- Hofmann, I. 1978 *Beiträge zur meroitischen Chronologie*. Bonn, Anthropos-Institut - St. Augustin.
- Hofmann, I. 1992 Review of Török 1988. *Orientalistische Literaturzeitung* 87: 28-30.
- Junker, H. 1925 *Ermenne: Bericht über die Grabungen der Akademie der Wissenschaften in Wien auf den Friedhöfen von Ermenne (Nubien) im Winter 1911-1912*. Wien-Leipzig, Hölder-Pichler-Tempsky.
- Kirwan, L. P. 1939 *The Oxford University Excavations at Firka*. Oxford, Oxford University Press.
- Kirwan, L. P. 1963 The X-Group Enigma: A Little-Known People of the Nubian Nile. In E. Bacon (ed.), *Vanished Civilizations: Forgotten Peoples of the Ancient World*, 55-78. London, Thames & Hudson.
- Kirwan, L. P. 1982 The X-Group Problem. In N. B. Millet and A. L. Kelly (eds.), *Meroitic Studies: Proceedings of the Third International Meroitic Conference Tronto 1977*, 191-204. Berlin, Akademie-Verlag.
- Kromer, K. 1967 *Römische Weinstuben in Sayala (Unternubien)*. Wien, Österreichische Akademie der Wissenschaften.
- Leclant, J. 1961 Fouilles et travaux en Égypte, 1957-1960 (Deuxième partie). *Orientalia* 30: 176-199.
- Leclant, J. 1963 Une Monnaie romaine à Zeidab. *Kush: Journal of the Sudan Antiquities Service* 11: 312-313.
- Leclant, J., A. Heyler, C. Berger el-Naggar, C. Carrier and C. Rilly 2000 *Répertoire d'épigraphie méroïtique: Corpus des inscriptions publiées*. Paris, Diffusion de Boccard.
- Lenoble, P. 1999 The Division of the Meroitic Empire and the End of Pyramid Building in the 4th Century AD: An Introduction to Further Excavations of Imperial Mounds in the Sudan. In D. A. Welsby (ed.), *Recent Research in Kushite History and Archaeology*, 157-197. London, British Museum Press.
- Millet, N. B. 1964 Gebel Adda Expedition Preliminary Report, 1963-1964. *Journal of the American Research Center in Egypt* 3: 7-14.
- Millet, N. B. 2005 The Meroitic Inscriptions from Gebel Adda. *Journal of the Society of the Studies of Egyptian Antiquities* 32: 1-65.
- Monneret de Villard, U. 1940 Le necropoli di Ballaña e di Qōstul. *Orientalia* 9: 61-75.
- Obluski, A. 2014 *The Rise of Nobadia: Social Changes in Northern Nubia in Late Antiquity*. Warsaw, Drukarnia Duo Studio.
- Petrie, W. M. F. 1905 *Ehnsaya 1904*. London, Egypt Exploration Fund.
- Presedo Velo, F. J., R. Blanco y Caro and M. Pellicer Catalán 1970 *La necrópolis de Mirmad (Argin Sur - Nubia sudanesa)*. Madrid, Ministerios de Asuntos Exteriores.
- Reiser-Haslauer, E. and H. Satzinger (eds.) 1979 *Funde aus Ägypten: Österreichische Ausgrabungen seit 1961. Katalog einer Sonderausstellung der Ägyptisch-Orientalischen Sammlung*. Wien, Kunsthistorisches Museum Wien.
- Richter, S. G. 2002 *Studien zur Christianisierung Nubiens*. Wiesbaden, Reichert.
- Ricke, H. 1967 *Ausgrabungen von Khor-Dehmit bis Bet el-Wali*. Chicago, Oriental Institute of the University of Chicago.
- Rose, P. J. 1992 *The Aftermath of the Roman Frontier in Lower Nubia*. Ph. D. Thesis, University of Cambridge.
- Rose, P. J. 2007 *The Meroitic Temple Complex at Qasr Ibrim*. London, Egypt Exploration Society.
- Sakamoto, T. 2016 Gammari revisité: esquisse typologique d'une «frontière» postméroïtique. *Dotawo: A Journal of Nubian Studies* 3: 67-82.
- Sakamoto, T. (forthcoming) "Isisblumen" au pays de Kouch: Bilan et perspectives. *Journal of the American Research Center in Egypt* 53.
- Säve-Söderbergh, T. 1981 *Late Nubian Cemeteries*. Solna, Esselte Studium.
- Strouhal, E. 1984 *Wadi Qitna and Kalabsha-South: Late Roman - Early Byzantine Tumuli Cemeteries in Egyptian Nubia I*. *Archaeology*. Prague, Czechoslovak Institute of Egyptology - Charles University Prague.
- Török, L. 1974 An Archaeological Note on the Connections between the Meroitic and Ballana Cultures. *Studia aegyptiaca* 1: 361-378.
- Török, L. 1979 The Art of the Ballana Culture and its Relation to Late Antique Art. In F. Hintze (ed.), *Africa in Antiquity: The Arts of Ancient Nubia and the Sudan*, 85-100. Berlin, Akademie-Verlag.
- Török, L. 1986 An Early Christian Silver Reliquary from Nubia. In O. Feld and U. Peschlow (eds.), *Studien zur spätantiken und byzantinischen Kunst: Friedrich Wilhelm Deichmann gewidmet III*, 59-65. Bonn, R. Habelt.
- Török, L. 1987 *The Royal Crowns of Kush: A Study in Middle Nile Valley Regalia and Iconography in the 1st Millennium B.C. and A.D.* Oxford, Archaeopress.
- Török, L. 1988 *Late Antique Nubia: History and Archaeology of the Southern Neighbour of Egypt in the 4th-6th c. A.D.* Budapest, Hungarian Academy of Sciences.
- Török, L. 1995 Egyptian Late Antique Art from Nubian Royal Tombs. In C. Moss and K. Kiefer (eds.), *Byzantine East, Latin West: Art-Historical Studies in Honor of Kurt Weitzmann*, 91-97. Princeton, Princeton University Press.
- Török, L. 1999 The End of Meroe. In D. A. Welsby (ed.), *Recent Research in Kushite History and Archaeology*, 133-156. London, British Museum Press.

- Trigger, B. G. 1969 The Royal Tombs at Qustul and Ballana and Their Meroitic Antecedents. *Journal of Egyptian Archaeology* 55: 117-128.
- Trigger, B. G. 1989 Review of Török 1988. *Orientalia* 58: 542-546.
- Welsby, D. A. 2002 *The Medieval Kingdoms of Nubia: Pagans, Christians and Muslims along the Middle Nile*. London, British Museum Press.
- Williams, B. B. 1991 *Noubadian X-Group Remains from Royal Complexes in Cemeteries Q and 219 and from Private Cemeteries Q, R, V, W, B, J, and M at Qustul and Ballana*. Chicago, Oriental Institute of the University of Chicago.
- Zach, M. 1992 Nero und Meroe: Die alexandrinische Münzprägung als historische Quelle. *Beiträge zur Sudanforschung* 5: 165-178.

坂本 翼
リール第三大学エジプト学研究所
Tsubasa SAKAMOTO
Institute of Papyrology and Egyptology,
University of Lille 3